③ 「コロナ禍での児童生徒の自殺の現状と課題」

社会福祉法人飛鳥学院
スーパーバイザー　阪中　順子

◎中・高校生の自殺者数と自殺率の推移（資料）

〇８５年より、中・高校生の自殺者数と自殺率は増加傾向にあると言える。
とりわけ大きく自殺率が上昇している年は、いじめや著名な人の自殺報道があったときと重なる。昨年は一昨年より、１００人増加している。思春期の子どもたちは、周りの死や死の報道、社会の不安などに影響を受けやすいことがわかる。

◎児童生徒の月別自殺者数の推移（資料）

〇今年度１月～５月までの数字を見てみると、昨年以上に高止まり傾向にある。コロナ禍にある様々なストレスが影響しているのではないかと考えられる。

〇令和２年度の学校再開時の６月、長期休業明けの８月のときに自殺者数が急増している。４０年間の調査で９月１日が突出して自殺者数が多いと報告されているが、昨年は２学期開始が８月下旬になったことが影響していると思われる。

〇国立成育医療研究センターの調査（学校休校時、再開時、９月～１０月の３回調査）によると、**７歳～１７歳の子ども全体の７３％にストレス反応や症状**が見られた。２０２１年２月～３月の第５回調査では、「身体的健康は全年齢群で以前よりも低い結果、精神的健康は中高生では以前よりも低い結果」となった。
小学４～６年生の１５％、中学生の２４％、高校生の３０％に中等度以上のうつ症状があった。
小学校４年生以上の子どもの６％が「ほとんど毎日自殺や自傷行為について考えた」と回答した。

◎令和元年度及び令和２年度における児童生徒の自殺の原因・動機

〇上位６つを見ると、学業不振、その他進路に関する悩み（学校問題）、親子関係の不和、家族からのしつけ・叱責（家庭問題）、病気の悩み・影響（その他の精神疾患、うつ病）（健康問題）があげられる。

↓対応策として

・わかる授業、学力だけでない物差し→**安心安全な学校風土**
・心の不調の理解と対応
・安心感の持てる家庭環境

◎生き心地の良い町（生き心地の良い家庭・学校）

この自殺率の低さには理由がある：徳島県旧海部町

↓

・いろんな人がいてもよい⇒いろんな人がいたほうがよい
（凝集性と多様性のバランス）
・緊密すぎない、ゆるやかにつながる⇒誰でもあいさつ
（関心はもつが監視はしない＝繋がりつつもしばらない）
・人の評価は多角的に、長い目で⇒学力だけでない物差しを
（職業、学歴、財力とかではなく、人柄や問題解決能力で評価）
・どうせ自分なんて、と考えない⇒自己信頼感・効力感の高さ
（誰にでも必ず何か出来ることがある）
・病、市に出せ⇒弱さを出しやすい環境、援助希求能力の高さ
（悩みを早めに大っぴらにすることで誰かが助けてくれる）

↓生き心地の良い町は生き心地の良い　家庭・学校につながる

すべての子どもたちの「**こころの危機**」、「**いのちの危機**」をしのいだり、乗り越えたり、支え合ったりできる力をどう培うのか。

↓

未来を生き抜く力を育む（自殺予防教育）

その中でハイリスクな子どもへの対応はどうしたらいいのか。

↓

個別支援、役割を決めてチームで対応

◎自殺の危険の高い子ども

・両価性（生と死の間で揺れ動いている）
・衝動性（自殺衝動は長く続かない）
・柔軟性を欠いた思考

↓

死にたいくらい辛い・・もし、その辛さが和らぐのなら、**ほんとは生きたい**

◎希死念慮への対応

『「死にたい」って言っちゃダメ！』などとは言わない！

ほのめかさないよりも、援助関係が続くことが大切。
「死にたい」と言える関係性が大事
「死にたい」の向こうにある「**見えない困りごと**」を考える。

〇コロナ予防：ソーシャルディスタンスを保つ
いじめ防止：ゆるやかであたたかな距離感
自殺予防　：弱音を吐ける「絆」が必要

↓

そのためには**監視をするのではなく関心を持ち合うこと**が大切

孤立は「自殺」のキーワード　絆と気づきは自殺予防の第一歩